

医心 伝心

富山マラソン2016救護活動に参加して

県医師会理事 長田 拓哉

平成28年10月30日(日)、富山県最大規模のフルマラソン大会「富山マラソン2016」が開催されました。前日29日(土)は肌寒い雨模様でしたが、当日は爽やかな秋晴れとなり、1万2041人のランナーが高岡市古城公園から新湊大橋を経て富山市富岩運河環水公園に至る42.195kmに挑みました。

これだけ大きな大会ですからサポートも大変です。富山県医師会でも馬瀬会長のもとで道振理事が中心となり、ランナーの安全と命を守るべく、県実行委員会と共に入念な準備を進めてきました。当日は32名の医師が14の救護所に配置され、実際の診療に当たりました。また14名の医師が大会救護本部に詰めて、スムーズな状況把握と医療体制の確保に努めました。当日は富山県立中央病院が救急輪番であり、救急車による患者搬送もありましたが、人命に関わる大きな事故もなく、本当に良かったと思います。

本来お祭り好きな私は、日頃の運動不足も顧みずに本大会にエントリーしておりました。しかしフルマラソンを走った経験もなく、大会が近づくとつれて本当に大丈夫なのかだんだん心配になってきていた所、道振理事より救護班の医師が1名不足して困っている話を伺い、マラソンランナーの命を守ることも理事の仕事の一つと言い訳して(内心ほっとしながら)救護班医師の仕事を受けました。私の担当はゴール地点に設置されたフィニッシュ第2救護所であり、整形外科の関先

生以下医師(4名)、看護師(1名)、理学療法士(2名)、看護学生(3名)、行政職員(2名)のスタッフが配置されました。

当日は朝9時に高岡でマラソンがスタートしました。11時30分前には最初のランナーがゴールしましたが、救護室が本当に忙しくなったのは12時30分を過ぎた頃からです。以後断続的にランナーが救護室に運び込まれ、最終的には17時を過ぎて辺りが冷え込んで来た頃に業務が終了しました。以下、業務を通じて感じた事を書きます。1、ベッド、毛布、枕が足りない。混み合った時には冷たい床にシートを引いてランナーに寝ていただきましたが、やはりベッドが3台は必要と思われます。また16時を過ぎて低体温症のランナーが続けて運ばれてきましたが、暖める毛布や暖房器具が不足しました。もし大会当日が雨だったらと思うとぞっとします。お湯を沸かすためにカセットコンロとやかんがありました。電気ポットが良いと思います。2、ボランティアにもっと配慮をしていただきたい。ボランティアの方々は寒い外で食事の配給無く一生懸命に頑張っていました。パンの一つ、温かい飲み物の一つがボランティアの方々にとっての励みになるのではと強く思いました。来年に向けての申し送りになりましたら幸いです。